

J・コンドルの伊香保行と写生(スケッチ)について

J. Conder's trip to Ikaho and his sketches

平山 育男
HIRAYAMA Ikuo

キーワード：J・コンドル、伊香保、写生（スケッチ）
Keywords：J. Conder, Ikaho, sketch

This article examines how J. Conder spent his summer vacation, Conder's trip to Ikaho and sketches at Ikaho. The following points became clear.

Condor went to Ikaho at least in August 1881 and August 1884. We can see 14 sketches that Conder made at Ikaho. The sketches that Conder drew at Ikaho are two inns, Soryu-mon of Haruna Shrine, Tamau-an, the scenery from Shirai, the scenery from Budayu's inn, five people, tree, map, and the Rokaku-do of Mizusawa Kannon. For the Ikaho trip at that time, the horse-drawn carriages were used up to Gunma prefecture, and after that, they headed by foot, kago, and jinrikisya.

1 はじめに

明治10(1877)年1月にお雇い外国人として来日したJ・コンドルは、以後、夏期休暇の期間を中心として比較的長期間、日本の各地を訪れたことが知られている。

その理由は、当時の外国人同様、日本の酷暑を避けるため、避暑の目的が第一目的と考えられるが、コンドルの残したスケッチ・ブック¹⁾を通覧すると、そこには避暑地における数々の写生(スケッチ)を確認することができる。

そこで、本稿では来日後におけるコンドルによる夏期の過ごし方を見た上で、コンドルの残した伊香保における写生(スケッチ)、伊香保行の内容を明らかにすることを目的とする。

2 コンドルが過ごした夏期休暇

コンドルが明治10(1877)年1月に来日して以後、明治20(1887)年までの間における、夏期休暇における過ごし方について、まずは検討を加えたい。

- ・明治10(1877)年
コンドルの夏期の動向は明らかではない。
- ・明治11(1878)年
コンドルの署名に加え、同年8月の記載を持つ「上野博

物館切面百分壺之図」が残る^{注1)}。

- ・明治12(1879)年
コンドルの夏期の動向は不明である。
- ・明治13(1880)年
コンドルのスケッチ・ブック第3冊によれば、この年8月4日の日付を持つ、日光裏見ノ滝の写生(スケッチ)が存在することから、この年、コンドルは夏期休暇に日光を訪れたと判断することができる。
- ・明治14(1881)年
後述するように、明治14(1881)年8月の記載を持つ榛名山における写生(スケッチ)が存在することから、この年における伊香保行を確認できる^{注2)}。
- ・明治15(1882)年
山里謁見所について、コンドルの署名と明治15(1882)年7月付の記載を持つ図面が残されている^{注3)}。
- ・明治16(1883)年
暁齋の絵日記において、この年8月、コンドルの自宅における記載がある^{注4)}。
なお、コンドルのスケッチ・ブックには月の記載はないが、この年、箱根における写生(スケッチ)が残る^{注5)}。
- ・明治17(1884)年
この年7月5日よりコンドルは京都へ向かった^{注6)}。更に、8月17日に伊香保へ向かっている^{注7)}。
- ・明治18(1885)年
明治18(1885)年8月1日、コンドルは上野から日光へ向かい、やや長期の滞在を行っている^{注8)}。
- ・明治19(1886)年
コンドルの夏期における動向は明らかではない。
- ・明治20(1887)年
この年夏期におけるコンドルの動向は明らかではない。

3 コンドルによる伊香保滞在時の写生(スケッチ)

このように、コンドルは少なくとも明治14(1881)年と明治17(1884)年の2回に渡って伊香保の地を訪れたことが判明する。そこで、以下ではコンドルによる写生(スケッチ)のうち、伊香保周辺において制作したと考えられる作品を図1から図7に示し、各図について写生(スケッチ)内の文字情報と描写内容を示した上で、記載内容について検討を行う。

3-1 写生(スケッチ)の文字情報

- ・図1-1
図内には、向かって右下に
Ikao
の記載を確認できる。
- ・図1-2
図内には、向かって左上に
Ikao
の記載を確認できる。
- ・図2-1
図の向かって左下に3行に渡り
Haru na San
Soriyu Mon
Aug 1881
の記載を見ることができる。

・図2-2

図の向かって右下に

Ikao

Mukayama

とする記載がある。

・図3-1

図の下部に縦書きで

群馬県西群馬郡白井駅大宮橋ヨリ子持山ヲ見ル

との記載があり、図の向かって右下に

Gunma ken

no Ikao

と記される。

・図3-2

図の下部中央に

View from Hotel

Budayu Ikao Ikao

と記される。

・図4-1から図4-5

いずれも図の向かって右下に

Ikao

とある。

・図5

画面向かって右上に

Trees

Ikao Round to Benten

no Taki

Sep 05

とある。

・図6

画面中央付近に

Ikao

とあり、周囲の地名などが記される。

・図7

図の向かって右下に

Mizusawa at Ikao

とあり、この他図内では、数カ所にわたり色名などの記載がある。

3-2 写生(スケッチ)の描写内容

・図1-1

この図は、近景には樹木があり。中景に木造3階建となる入母屋造の建物を中心として複数の建物が描かれ、遠景には特徴的な山並みが描かれる。

・図1-2

この図では近景にはせせらぎに架かる橋と樹木、中景に木造3階建を中心とする建物が描かれる。

・図2-1

図で近景に石階段と人物が描かれ、中景には四脚門の形式で入母屋造で千鳥破風、軒唐破風の取り付く門、傍らにはそそり立つ巖が描かれ、背景には高い木々が配される。

・図2-2

図では近景に樹木があり、画面中央の中景に茅葺寄棟の建物を中心として数棟の建物が描かれ、背景は深い山となる。

・図3-1

図では、近景に蛇行する河川、中景色に河辺の林、遠景

に特徴的な山並みが描かれる。

・図3-2

写生(スケッチ)では近景に旅館と考えられる建物、中景色に樹木、遠景には山並みが描かれる。

・図4-1から図4-5

いずれも写生(スケッチ)も人物画となる。

・図5

図では枝振りのよい、樹木が描かれる。

・図6

図では伊香保を中心とする地名が描かれている。

・図7

図では画面中央には六角二重の建物が配され、背景は樹木となる。なお、この写生(スケッチ)のみ彩色がなされる。

3-3 写生(スケッチ)の記載内容の検討

・図1-1

この図は、伊香保温泉の旅館の姿を描いたものと判断できる。なお、この写生(スケッチ)に対応する古写真が現存する(写真1)。

・図1-2

この図も伊香保における旅館を描いたものと判断できる。

・図2-1

この図は、写生(スケッチ)内の記載にある通り、榛名神社の鉾岩際に位置する双龍門を描いたものと判断できる。この門は、安政2(1855)年の建築^{注9)}で現在は国指定重要文化財とされている(写真2)^{注10)}。

・図2-2

写生(スケッチ)では伊香保における向山の景観が描かれたと考える。

向山は、明治13(1880)年に編まれた『いかほはなし』に

○向山 伊香保町より西の方湯の沢の溪を隔たる山をいふ(此路ハ榛名の順路也)紅葉秋草多くあり此山の半腹を開きて玉兎庵とよぶ料理店あり鯉うなぎを名物とす眺望も宜く閑静にして仙境といふも如斯処をいふにやあらん園中に弁財天の祠あり音曲をたしむ者参詣せり^{注11)}

と記されるものである。明治15(1882)年刊行の『伊香保志』には更に詳しく

○向山 湯乃沢を隔て、西にある山なり山の本名を一文字といふ伊香保の町と相向へぞ向山の名なり天保三年村民福田某の開く所にして土地幽邃風色好く玉兎庵といへる酒肆あり鱒鯉鮒を池に畜ひて客に供す傍に弁財天の祠あり北の谷を兎谷といひ西の山を袋山といふ此辺野山楓樹多く紅葉の名所とす伊香保より榛名へ趣くそこの向山を過ぎ此より南小石の坂道^{注12)}

とする。つまり、この向山は天保3(1832)年に福田氏によって開かれたもので、玉兎庵とよぶ料理店が営まれたという。なお、明治18(1895)年刊行の『伊香保温泉概略』には

名勝…向山(六勝亭割烹店皇太后ノ行啓アリシ所)^{注13)}

とあり、割烹の名称を「六勝亭」としている。但し、この点については明治13(1880)年刊行の『伊香保温泉入浴法幼童論』には

○向山 紅葉の名所にして月雪の眺に富み虫間に最上の地なり此所に割烹店あり玉兎庵といふ、亦六勝亭と



図1 Vol.3 8頁 図1-1 図1-2



図4-1 図4-2



図4-3 図4-4



図4-5

図4 Vol.3 11頁 向かって右下の1枚は含まない



図2-1



図2-2

図2 Vol.3 9頁



図5 Vol.3 44頁



図6 Vol.3 背面見返し



図3-1



図3-2

図3 Vol.3 10頁



図7 Vol.2 8頁



写真1 伊香保 図1-1に対応 古写真



写真2 榛名神社双龍門
図2-1に対応



写真3 伊香保 千本松
図5に対応



写真6 水沢観音六角堂 図7に対応



写真4 向山 玉兔庵/六勝亭 図2-2に対応 古写真



図8 『伊香保温泉略説』十勝地ノ内六勝亭ノ景桜ノ名所



写真5 渋川市白井付近からの子持山 図3-1に対応



写真7 木暮武太夫旅館からの眺望 絵葉書 図3-2に対応

呼ぶ庭上の池にハ常に鯉鰻鯰を囲ひ客の需に応じて塩梅す尤佳味なり^{注14)}

とあるため、この店は玉兎庵とも六勝亭とも呼ばれていたことが分かる。

写生(スケッチ)はこの店舗を描くもので、玉兎庵、六勝亭と呼ばれたものとすることができ、ほぼ同位置から撮影された古写真や図が残る(写真4、図8)。

・図3-1

画面中に記される「群馬県西群馬郡白井駅大宮橋」の「白井」とは、現在の渋川市白井となり、付近には大宮姫神社が所在する。なお、記載にある大宮橋とは、利根川に明治3~4(1870~71)年に永井長治郎によって架橋され、明治20(1887)年頃まで現存したものと判断できる^{注15)}。写生(スケッチ)ではこの北方に位置する子持山などが描かれたと考えることができる(写真5)。

・図3-2

この写生(スケッチ)では文字情報にあるとおり、コンドルが利用した武太夫こと、木暮武太夫の旅館上層階から付近の山を望んだ景観を描いたものと判断できる。なお、この山は山姿より、伊香保の北北東に位置する子持山と判断できる(写真7)。

・図4-1から図4-5

伊香保に投宿中における人物写生(スケッチ)と判断できる。

・図5

この写生(スケッチ)は書き込みから、弁天の滝に至る経路に立った樹木を描いたものと判断できる。なお、かつてこれに似た樹木として伊香保には信玄旗立の松、千本松とも呼称されたものがあった(写真3)。

・図6

伊香保を中心とする地図と判断できる。

・図7

現在の渋川市伊香保水沢に所在する、水沢寺六角堂を描いたものと判断できる。なお、この建物は18世紀の建立^{注16)}とされている^{注17)}(写真6)。

4 コンドルによる伊香保行の行程と旅費など

コンドルがどのようにして伊香保へ赴いたのかを示す資料は残らないが、コンドルの写生(スケッチ)と時代的な要因から、その行程を考えてみたい。

4-1 コンドルによる伊香保行の行程

この時代、上野からの高崎線は明治16(1883)年に熊谷までが仮営業し、明治17(1884)年に高崎、前橋まで延長された^{注18)}。このため、少なくとも明治14(1881)年における伊香保行において鉄道を用いることはできず、明治17(1884)年になって鉄道を用いた移動を行ったとすることができる。

鉄道開通以前における、東京-伊香保間の移動については、伊香保の湯を知らしめたベルツの妻に当たる花子が記した『欧洲大戦当時の独逸』に当時の状況が詳しい。これによると

明治十二三年頃から日本に参つて居た西洋人達の間に、上州伊香保の温泉に行く事が流行しました。宅のベルツも十四年に今日の千明の下の処に、別荘風な簡

易な住居を建てました。…其頃伊香保へ参るには、今の万世橋の所から乗合馬車が出ましたので、買切りで先方まで参る事もありました。此馬車は板橋駅を通過して行くのですから、その途中本郷の赤門前で待合せて、夕方乗込んでも一日一晩ガタ、と揺す振られて渋川へ着き、それからその夕方人力車に乗替へてその日の中に先方に着きました。船で行けば、深川の扇橋から内国通運会社の汽船で堅川筋を抜けて、江戸川筋を溯り、倉我野で下り、それから馬車か車で渋川へ参り、此所が立場で、前の通りにして伊香保へ行くのです。^{注19)}として、鉄道開通以前の段階における馬車での移動の様子を記している。つまり東京の万世橋から本郷、板橋を通り、1日かけて渋川へ着くもので、以遠は後述するように駕籠及び人力車があった。

また、ベルツは明治13(1880)年の日記で

八月四日(東京-前橋)

怪しげな馬車で、夜の二時に出発。例によって例の如く、寒心にたえないやくざな馬。美しい星空。すばらしい日の出。樹々の上方や前方をおおう金色の母屋は形容する言葉もない。

東京から十三里の鴻巣で中食。計画の鉄道が全交通を独占したあかつきには、中仙道一帯のはたごやはすべてどうなることか?

川にさしかかったところ、橋がみな増水で流されてしまっている。大きくまわり路。馬が悪いので、二時のはずが晩の七時にやっと前橋に着いた。村や町の全部が、もともと女郎屋ばかりから出来ているといってもよいくらいの有様を見るのは興味がある。あんなにたくさんの連中が一体、何によって生計を立てているのか、どうも自分にはよくわからない。前橋の人たちは、例によって全く不適切である。どの宿の主人も、外人を宿泊させようとしない。

八月五日-

人力車で朝の七時、前橋出発。九時、渋川(三里)。徒歩で伊香保へ。いつもの通り、大いに歓待された。

午後直ちに、伊香保の上方一時間の距離(一、一〇〇メートル)にある硫黄蒸気浴の蒸湯へ。^{注20)}

としている。即ち、出発は8月4日午前2時で、到着は午後2時の予定が、増水のため午後7時に前橋着となり、ここで1泊して翌5日午前7時に前橋を出て、午前9時渋川着、以後は徒歩で伊香保へ向かい午後には蒸湯へ赴いたとしている。つまり、平常時は馬車によれば東京-前橋が12時間、前橋-渋川が2時間の行程であったことになる。なお、渋川-伊香保間は9km程、高低差400m程である。

おそらくこれらの例にならば、コンドルもベルツと同じく、明治14(1881)年には東京から渋川まで馬車により移動を行い、ここから伊香保に向かったと判断できる。平常時は馬車によれば東京-前橋が12時間、前橋-渋川が2時間の行程であった。更に渋川-伊香保は、徒歩で2時間から2時間半程度の時間を要することとなる^{注21)}。

4-2 コンドルによる伊香保行の旅費

当時の馬車運賃は、明治13(1880)年8月刊行の『浴客必読伊香保説話』には

○東京日本橋ヨリ…○渋川…○伊香保町東京より当所

まで里程三十五里一町余なり此道ハ本道^{注22)}

○東京より高崎駅並びに前橋駅まで日々往復の馬車ハ東京ハ神田区万代橋うち連雀町美土代町に馬車会社数軒あり賃ハ一里金六銭づゝの割合なり○荷物運送ハ着日の遅速によつて賃銭定まらず^{注23)}

とある。また、明治13(1880)年12月刊行の『絵入道中独案内』には

東京万世橋ヨリ高崎迄乗合馬車出ル一里七銭割^{注24)}

とあるため、東京-渋川の馬車運賃は明治13(1880)年8月の段階で2.02円、明治13(1880)年12月の段階で2.46円となる。

一方、明治14(1881)年刊行の『改正東京案内』によれば、中仙道郵便馬車として

○発車時刻

東京より前五時同七時同八時后七時

高崎より前四時后七時

前橋より前五時后四時

熊谷より前七時同八時

として、運賃は高崎及び前橋まで1.40円、荷物は100目(3.75kg)まで0.35円、以上は100目(3.75kg)につき0.25円とある^{注25)}。

なお、鉄道開通直後となる明治18(1885)年における運賃は、上野-高崎間で、特別が3.38円、上等2.00円、下等1.00円であった^{注26)}。高崎以遠については同じ明治18(1885)年の資料によれば、高崎-伊香保は人力車で0.90円、駕籠で1.80円、渋川-伊香保は人力車で0.35円、駕籠で0.80円とある^{注27)}。

また、伊香保における宿泊料(昼食料)は、上が0.75円(0.30円)、中が0.50円(0.20円)、下が0.25円(0.12円)、外国客は1人1泊席料が1円とされた^{注28)}。

4-3 コンドルによる伊香保の滞在

図7に掲げた手書きの地図によれば、他の写生(スケッチ)に記される榛名神社、弁天の滝などの記載も見ることができる。おそらく、コンドルはこの手書き地図を頼りとして、彼の地に向かい写生(スケッチ)を行ったと判断することができる。

補章 コンドルとベルツの関係

本論では、伊香保とコンドルの関係を述べたが、伊香保を広く世に紹介したのは、同じお雇い外国人で内科医のベルツであった。そこで最後にコンドルとベルツの関係を見ておきたい。

ベルツの伊香保行は、明治11(1878)年^{注29)}と明治13(1880)年が日記などから確認でき、更にベルツの妻花子によれば

宅のベルツも[明治:著者注]十四年に今日の千明の下の処に、別荘風な簡易な住居を建てまして^{注30)}

とある。このため明治10(1877)年代では少なくとも明治11(1878)年、明治13(1880)年、明治14(1881)年の3ヶ年におけるベルツの伊香保行を知ることができる。一方、コンドルによる伊香保行は、明治14(1881)年と明治17(1884)年の2回を確認できたが、この内、明治14(1881)年において、ベルツとの重複を指摘できるが、具体的な両者の交流は未確認である。

ところで、ベルツとコンドルの関係を見る場合、外すことができない人物として河鍋暁斎を挙げることができる。コンドルが明治16(1883)年11月、暁斎に弟子入りして暁英の雅号を授けられた話は著名である^{注31)}が、ベルツも早くから暁斎の実力を認めていた。ベルツの日記によれば、明治12(1879)年10月20日に、ベルツは暁斎による早描きを見聞している^{注32)}。その後、ベルツの日記において暁斎についての記載は明治22(1889)年4月26日まで見られないが、この日の記事には

現在の日本最大の画家である狂齋[河鍋暁斎]は、もう今日はずまい、胃癌にかかっているのだ。かれの絵は漫画に類する。だが、構想が大きくて、出来栄えのどっしりとした点では、かれに匹敵するものはない。^{注33)}

とある。暁斎はベルツが記す通りこの日に逝去したが、臨終の場にはコンドルが後述のように同席した。臨終の様は以下の様であったとする。

暁斎翁死す。翁のまさに死せんとするや、門人昆徳爾氏、鹿島暁雨氏等、来たりて其の言はんと欲する所を問ふ。翁は口既に言ふこと能はず。唯合掌して後事を托するものの如し。よりにて声を挙げ、固く諾せりといふ。其の氣息の將に絶えんとする時、彫刻家石川光明氏来り。同氏亦後事を問ふ。翁合掌して、一子記六氏のことを托するものの如し。同氏答へて、固く諾せりといひしかば、翁は、欣然、安堵の体を示し、昆徳爾氏の手を握りて、死せり。昆徳爾氏先ず泣く。左右座する者、皆泣かざるなし。^{注34)}

また、ベルツは日本絵画の収集でも知られており、遺品3131点はリンデン美術館に収蔵され、その中には少なくとも14点に及ぶ暁斎の作品が含まれる^{注35)}。

このようにみると、コンドルとベルツの関係は暁斎を挟んで考察すると、少なからぬ関係を知ることができる。

5 さいごに

本稿は、J・コンドルによる夏期の休暇の過ごし方と伊香保行及び伊香保における写生(スケッチ)の検討を行った。明らかになるのは以下の諸点である。

- 1) コンドルは、少なくとも明治14(1881)年8月と明治17(1884)年8月に伊香保へ赴いている。
- 2) コンドルが伊香保で行った写生(スケッチ)は14枚を確認できる。
- 3) コンドルが伊香保で実施した写生(スケッチ)は旅館2点、榛名神社の双龍門、玉兔庵、白井からの風景、武太夫の旅館からの風景、人物が5点、樹木、地図、水沢観音六角堂の4点である。
- 4) この時期の伊香保行には一般には群馬県内まで馬車が用いられ、以後は徒歩、駕籠、人力車を考えることができる。

参考文献

- 1) J. Conder: Sketch-book

注

- 注1) 河東義之: ジョサイア・コンドル建築図面集 I、解説 34 頁、中央公論美術出版、昭和 55 (1980). 8
- 注2) J・コンドル: スケッチ・ブック第 3 冊 9 頁
- 注3) 河東義之: ジョサイア・コンドル建築図面集 I、解説 41 頁、前掲
- 注4) 河鍋楠美: 暁斎絵日記の中のジョサイア・コンデル、10 頁、平成 9 (1997). 5
- 注5) J・コンドル: スケッチ・ブック第 3 冊 14 頁
- 注6) 河鍋楠美: 暁斎絵日記の中のジョサイア・コンデル、19 頁、前掲
- 注7) 河鍋楠美: 暁斎絵日記の中のジョサイア・コンデル、22 頁、前掲
- 注8) 河鍋楠美: 暁斎絵日記の中のジョサイア・コンデル、41 頁、前掲。なお、平山: J・コンドルのスケッチ・ブックの来歴と記載された年記の検討、日本建築学会計画系論文集 771、1092 頁、令和 2 (2020). 5、にこの年のコンドルによる日光行についての検討がある。
- 注9) 榛名町誌編さん委員会: 榛名町誌 民俗編、278-279 頁、平成 23 (2011). 9
- 注10) 双龍門は現存するが、現在は解体修理工事中のため、古写真となる絵葉書を示した。
- 注11) 篠田仙果: いかほはなし 4 紙表~4 紙裏、明治 13 (1880) 8
- 注12) 大槻文彦: 伊香保志中、頁記載なし、明治 15 (1882). 6
- 注13) 吾妻健三郎: 伊香保温泉略記、20 頁、明治 18 (1895). 4
- 注14) 篠田久治郎: 伊香保温泉入浴法幼童論、4 紙裏、明治 13 (1880). 8
- 注15) 渋川市白井の大宮姫神社のそばに立つ、子持村: 渡屋の渡り (石碑)、昭和 63 (1988).10、では明治四年 (一八七一) 施行の大宮橋は永井長次郎の設計であるとする。なお、『群馬県勢多郡横野村誌』によれば長治郎は上三原田に小字武井に生まれた。明治九年一月十日に凡そ八十四、五才で死んでいるから寛政年間の生まれであろう《中略》
- 白井と樽との間に刎橋を架けた
- 明治三年、長治郎は又北群馬長尾村白井の大宮神社裏から、本村樽の二本松に通ずる利根川へ刎橋を架けた、白井の埴田氏所蔵、のものに次の請負証書がある、敷島津久田の角田喜一郎が請負つて、工事を長治郎が施したものである。
- 橋請負証文の事
一金五百七十五両也
- 右者御村方大宮へ掛渡しに相成候刎橋用木代、並に諸職人手間代、鉄物代共一式、橋出来迄書面の金高にて請負普請仕候処相違無二御座一候、然る上者別紙目呂見帳 (もくろみちょう) の通り、早々取り懸り手堅く出来為_レ致可_レ申候、且受負金の内五十両也儘に受取申候、残金の儀は追々御渡し可_レ被_レ下候、依_レ之橋請負証文_レ如_レ件

明治三庚午年九月

勢多郡下津久田村

請負人 亀一郎 ○

請人 重蔵 ○

白井村御役人中様

此橋は白井町《中略》の出資により架せられ、左岸樽村分の道路敷地料として、毎年金十両づつ白井村から樽村へ支払う契約書も現存している、この刎橋は年々の大洪水にも流失せず、十七ヶ年の長さわたつて完全に通行することが出来た、木材橋としては最極限の寿命であろう、明治二十年頃には橋板は腐朽して桁のみとなつたが、幅二尺もある桁の上を危険を冒して通行する者もあるため白井町の青年会が貰い受け、解体材を本村上三原田の狩野兵吉 (通商藤作山師) に金八十円で売却した、その売渡証文も現存している、今も猶右岸白井地先の昔橋詰であつた大岩石の上に、当時の橋脚をはめこんだ、二尺四方深さ五、六寸の凹穴が十数ヶ所残存している、

とある。同書によると永井は 18 世紀末の生まれで、永井による刎橋は明治 20 (1887) 年頃まで現存していたと考えることができるため、コンドルが渡つた大宮橋とはこの刎橋と考えることができる。

また、滝沢典枝: 水車大工・永井長治、利根川文化研究 8、77 頁、平成 6 (1994).12、では長治郎が建設したといわれる刎橋の内、文献で確認できたものは、[中略]

・明治四 (1871)

大宮橋 (利根川 / 大宮 - 樽)

とある。ところで、この論文では永井の名前を、題名及び目次では「永井長治」と記すが、本文中ではいずれも「永井長治郎」としている。

群馬県姓氏家系大辞典編纂委員会: 角川日本姓氏歴史人物大辞典 10 群馬県姓氏家系大辞典、269 頁、平成 6 (1994).12、では

永井長治郎 (ながいじろう) (?~一八七六) 大工。三原田村 (赤城村) 出身。文政二年同村の天竜寺境内に回り舞台を建築。天保五年津久田 (赤城村) ~ 上白井 (子持村) 間にはね橋を作製。安政五年前橋藩の要請により、前橋名所となつたはね橋の万代橋を作製した。

とあるため、本稿では「永井長治郎」の記載を採用した。

なお、永井長治郎は天保 4 (1833) 年の段階においても、白井周辺で刎橋の架橋を行ったことが、角田恵重: 子持村史、422 ~ 425 頁、昭和 43 (1968).12、に記される。

- 注16) 群馬県文化財保護協会: 群馬県文化財目録附昭和 44 年 - 48 年指定文化財解説、81 頁、昭和 49 (1974). 3、によれば

観音堂と並んで六角二重塔が建てられている。[中略] これら全体としてみると、改修の箇所は見られるが、18 世紀の造営として本県内には珍しい、貴重なものである。

として、六角二重塔の建築年代は18世紀とあるため、本稿もこの記載に基づくものとする。

なお、水沢寺の現地傍らに立つ六角二重塔についての銘板によれば

昭和五十一年に屋根の葺き替え工事を実施したところ、相隣の心柱墨書の中に「于時文化十四歳、丁丑六月吉辰」の文字が見つかった。

なお、六地藏には宝永五年（一七〇八）、正徳二年（一七一二）、正徳五年の銘が記されたものもある。

として、建築年代は記されず、墨書銘と六地藏に刻まれる銘のみの紹介に留まる。

注17) 伊香保町教育委員会：伊香保誌、734頁、昭和45(1970).10、によれば

現今堂新築宝暦五年乙亥三月ヨリ発起シ三拾三年ニ至リ天明七年丁未八月竣功終ル、当時ノ僧水沢寺第八世貫隆法印、建築費金千六百〇七両〇弍朱錢貳拾貫四百文（建立帳アリ写ス）

とある。ここで「現今堂新築」とは本堂と考えることができる。

注18) 日本国有鉄道旅客局：日本国有鉄道停車馬一覧、107頁、昭和60(1985).9、によれば、高崎駅は明治17(1884)年5月1日、同110頁、によれば、前橋駅は明治17(1884)年8月20日の営業開始とする。

注19) ベルツ花子：欧洲大戦当時の独逸、254～255頁、審美書院、昭和8(1933).5

注20) トク・ベルツ編、菅沼竜太郎訳：ベルツの日記 第一部上、88～89頁、岩波書店、昭和26(1951).9

注21) 東京-高崎間の馬車交通については、篠原宏：明治の郵便・鉄道馬車、雄松堂出版、45～83頁、昭和62(1987).4、に詳しい。

注22) 篠田久治郎：1紙表から裏、浴客必読伊香保説話、明治13(1880).8

注23) 篠田久治郎：6紙表から裏、浴客必読伊香保説話、前掲

注24) 牧野豊太郎：絵入道中独案内、16紙表、明治13(1880).12

注25) 児玉永蔵：改正東京案内、23紙裏、明治14(1881).3

注26) 吾妻健三郎：伊香保温泉略記、63頁、前掲

注27) 吾妻健三郎：伊香保温泉略記、62頁、前掲

注28) 吾妻健三郎：伊香保温泉略記、61頁、前掲。なお、昼食を基準とすると、1万倍したものが現代に価格におよそ匹敵すると考えることもできよう。

注29) 市川善三郎：ベルツと草津温泉、74頁、あさを社、昭和55(1980).1

注30) ベルツ花子：欧洲大戦当時の独逸、254頁、前掲

注31) 毎日新聞社：東京横浜毎日新聞、明治16(1883).11/27、2頁

注32) トク・ベルツ編、菅沼竜太郎訳：ベルツの日記 第一部上、71～72頁、前掲

注33) トク・ベルツ編、菅沼竜太郎訳：ベルツの日記 第一部上、146頁、前掲

注34) 飯島半十郎：河鍋暁斎翁伝、153頁、平成24(2012).

4。なお、本書は飯島が明治時代にまとめた稿本をまとめたものである。

注35) ドリス・クロワッサン、若林操子：リンデン美術館蔵ベルツ・コレクション日本絵画図版編、解説編、講談社、平成3(1991).9